

令和6年度第4回小平市社会教育委員の会議要録

と き：令和6年10月10日（木）午前9時30分～午前10時50分

ところ：市役所5階 502会議室

1 出席者

小平市社会教育委員 7人（3人欠席）

傍聴者 なし

2 内 容

<議題>

資料に基づき、事務局から説明を行った。

- (1) 令和6年度東京都市町村社会教育委員連絡協議会第4ブロック研修会について（報告）

<事務局報告>

各課・各館より、実施事業等について報告した。

【地域学習支援課】

- (1) 令和6年度非核平和学習事業について（報告）

【公民館】

- (1) 公民館主催イベント（8月）について（報告）
- (2) 公民館主催イベント（10月、11月）について

【図書館】

- (1) 第4次小平市子ども読書活動推進計画 令和5年度進捗状況について（報告）
- (2) 図書館主催イベント（9月）について（報告）
- (3) 図書館主催イベント（10月、11月）について
- (4) 東京文化財ウィーク 2024 講演会と企画展示について

3 議題及び事務局報告についての意見・質疑応答

○委 員 議題(1)について、多様な世代の担い手を育成するために必要なことは、をテーマにグループディスカッションを行った。参加したグループでは、三つ必要なことがあるのではないかと結論に至った。まず一つ目は、核となる人が必要であること。二つ目は、テーマを明確にすること。三つ目は、時代に合った組織の改編であった。一つ目の、核となる人とは、言葉の意味のとおり、核となる人が必要であるということ。二つ目のテーマを明確にすることとは、関わる人それぞれが切り口を作ることによって、テーマがはっきりして新たなつながりをつくること

ができる、とのことであった。自分の場合は、現在、活動に携わっている和太鼓を切り口として、広がりを作ることができると思った。三つ目の時代に合った組織の改編とは、現在、PTAの活動に注目が集まっているが、活動のすべてが不必要ではなく、必要と思われることを、少し形を変えて活動を保っていくことが必要ではないかとの結論に至った。

このグループディスカッションから、例えば小平ではどんなことができるかなと、自分で考えてみた。社会教育委員の会議では、事務局報告を受けて、社会教育委員が意見する形で会議が進められている。そのときに、報告いただいた行事に関して、いつも参加しない世代を呼ぶために、どのような工夫ができるのか検討するなど、さまざまな角度から捉えることができると思った。

○委員 議題(1)について、今回の開催場所には初めて行った。清瀬駅前のアミューホールの7階にある会場で、小平市から見る風景と大分違うことを感じた。清瀬市と小平市は、近隣市ではあるが、日常見ているものが異なると、考え方も変わってくるのではないかと思いながら研修に臨んだ。

研修の事例発表の中では、二つ目のウイズアイの活動がすごく気になった。約30年前に活動を始めた団体であり、最初は赤ちゃんの面倒を見るところからスタートしたが、その子たちが成人し、活動の担い手となり戻ってきてくれている話であった。この団体は、30年間の活動の中で、清瀬市から多くの委託事業を受けているが、支援を受けた者が担い手として戻ってくることから、外部からスタッフを募集することはしていないとのことであった。どのような団体でも、高齢化など、担い手の確保が難しいと言われる中で、この団体は、活動の中で育ってきた者が再び戻ってきて、年齢に応じた支援に携わっている。さらに、親世代になると理事などの立場で活躍されるなど、本当にすごい活動をされていると思った。

また、三つ目の事例は、福祉分野のコーディネーターからの発表であった。高齢者の支援だけではなく、いろいろな情報網を持っていることから、例えば青少対のようなこどもたちと関わる活動についても紹介できるとの話であった。こどものことは、教育委員会、子育て支援に関しては、子育てを担当している部署が専門かと自分は思っていたので、そのような連携を取る道筋を教えていただいたことが勉強になった。

また、開催市の清瀬市の教育長が、グループディスカッションに入っていたのが印象に残った。このような研修があるのだと学んだ。

○委員 議題(1)について、私が参加したグループは、市の職員、民生委員、統括コーディネーター、福祉士などさまざまな分野の方がいた。どのような活動をしていても、同じ悩みを抱え、それでも前向きな気持ちで頑張っている話を伺い、とてもうれしく思った。

グループディスカッションは、とても居心地よく過ごすことができた。清瀬市の社会教育委員の会議の議長の倉持先生が、グループの司会を務めることで、グループディスカッションの参加者から、とてもすばらしい引き出し方をしていた。そのファシリテーターの務め方も勉強になった。

○委員 議題(1)について、教育長挨拶におけるブルーリボンキャンペーンの話があって、とても印象深くて記憶に残った。

まず、生徒会の生徒が挨拶の運動を広げたいとのことから、ブルーのリボンを手や胸につけて」挨拶することを始め、それがPTAに広まり、さらに地域に広がったとのことであった。

本来はすれ違う人たち皆さんに挨拶すればいいのであるが、始めるとなるとなかなかきっかけがつかめない。そこできっかけの一つとして、ブルーリボンをつけているのはいいなと思った。生徒から始まったことが地域に広がり、挨拶が自然にできる地域になったことが素晴らしいと思った。そのようなことで何かできるといいなと思った。

○委員 事務局報告の図書館の報告(1)についてすごくいいなと思ったのが、夏の「ネットde古文書講座夏休みスペシャル」である。古文書をデジタル技術によってパソコンで見ることができるようになったのは、初めてではないかと思う。パソコンで古文書を見ることができて、こどもたちが考える問題も用意されている。こどもたちの検索意欲が出てくると思った。

また、「こだいらデジタルアーカイブ」の利活用は今回から始まったと思うが、小平市の歴史や年代ごとの地図に解説が加えられていて、小平市の過去をデジタルで振り返る場面もあり、調べがいがあると思った。特に、定点観測の写真は、定点の写真を過去20年ぐらいで比較できるようになっている。よく記録されていると感じた。

また、平櫛田中の関連資料の一部作品が3D表示で出るのは、展示された原画では見ることができない部分についても、マウスの操作で上から下まで全部見ることができる。これは画期的だと思い感動して見ていた。デジタルコンテンツはアクセスがしやすく、こどもたちの多様な検索にも対応していることから、こどもたちの興味をひく要素が随所にあると感じた。

一点、質問がある。図書館事業概要の93ページの統計について。所蔵資料数が120万冊と記載がある。小平市にこれだけの所蔵資料数はあるのか。貸出数については、市民一人当たり6.97である。市民の人数で割ると、貸出数は結構多いと思う。この統計の数値の評価としては、小平市は、蔵書数は多いが貸出数が少ないと見るのか、選択肢が多く利便性が高いので、ニーズにマッチしているとみればよいのか。また、指標による他館との比較を、どのように捉えればよいのか、分からないので教えてほしい。

○事務局 指標について、どのように見るのかは難しい。この表は、小平市のデータしか載っていないが、他市も同様のデータを取りまとめている。蔵書数に関して、多摩地区で100万を超えて蔵書を持っている市は数えるほどしかなく小平市は、蔵書数が多い市であると言える。

一方で、貸出資料数は、多摩地区の中でも、蔵書数と比較して、それ程多くはないのが現状である。この結果をどのように評価し、どのように対応を取っていくか、図書館として大きな課題である。また、小平市は、図書館が8館あるので、8館分同じ図書をそろえなくてはいけない場合もあり、単純に120万冊あるから、120万種類あるわけではない。その点で、実際の蔵書種類数は、これよりも少なくなる。

利用人数については、コロナが終息したことで、一時的に回復してきているが、減少傾向ではある。この点に関しては、今後、課題として捉えていきたいと思う。

○委員 事務局報告の公民館の(1)の友・遊こどもまつりについて、台風が心配であったが、夏休み最後にこどもたちが伸び伸びとして、喜んでくれる行事を行えたことがよかった。

○委員 感想と質問がある。まずは感想である。先ほど委員から友・遊こどもまつりのお話が出たが、私も、初めて中央公民館の友・遊こどもまつりに参加し、「名前をきれいな字で書いてみよう！」というブースにいた。小平市書道連盟の7名で参加させていただいたが、さまざまな世代の方に書道を体験していただけた。こんなに盛り上がるんだねと、仲間とスタッフと言っていた。また、ほとんどのスタッフが、こういうまつりがあるのを知らなかった。こんなに楽しいなら、また来年も参加させていただきたいと言っていた。夏休みの最後の思い出として、すごくいい企画だなと思った。来年も参加したいと思う。

次に、資料No.6の1番、こどものためのライブラリーコンサートについての感想である。初めての企画としていろいろ準備されていることが、本当に肌で感じられた。図書館の本に囲まれて生の演奏を親子で聞くことができる本当にすばらしい企画で、お子さんたちにとっては、本が好きないいチャンスになると思った。少し児童コーナーが狭いので、100人の参加者がぎゅうぎゅう詰めであった。気になったこととして、お父さんが一番前に座っていて、お子さんが後ろのほうに行ってしまったことがあった。大人の方は後ろへなどの声がけがあってもよかったのかと思った。

図書館の構造上、1階がレストランで、11時半から営業開始だったこともあり、2階の会場に、レストランのにおいが上がってきていた。そのにおいが少し気になった。イベントの開始時間を少しずらすことはできなかったのかと感じた。企画としてはすばらしい企画であった。

次に質問がある。資料No.5-2にある本の廃棄について、である。中学校でボランティアをしていて、先日、図書の本の廃棄のお手伝いをした。新しい本をたくさん購入していただいているので、生徒たちは恵まれた環境にあると思うが、新しい本が入ると、廃棄の本も出てくる。そのお手伝いをしている中で、廃棄する本はどうするのですかと司書の方に聞いたところ、廃棄するしかないとのことであった。

そこで、ボランティアに参加した人たちで一緒に梱包して捨てることになった。参加した人たちからもったいないという声が出ていた。廃棄する本については、もらうことはできないのか。また、リサイクルでその学校の生徒に渡すなどの取組はできないのか。

○事務局 学校図書館で本の廃棄については、本が物理的にぼろぼろになっていることや、本の内容が、学校などで教えていることと変わってしまっていることがある。例えば、歴史の年号や、地理の国名などである。新しい地名の記載がないものは、基本的に廃棄していく考え方である。

リサイクルに出すことについては、データが古いこともあり、こどもたちに古いデータのものを渡すことを考えると、基本的には紙資源のリサイクルに出すべきではないかと思う。

○委員 資料に同封されている「心を豊かにする図書館をめざして」の96ページの利用統計について。ばらつきはあるが、多様な世代の方が図書館を利用していることが分かった。また一方で、この統計を見て思い出した新聞の記事がある。日本経済新聞の9月13日付の記事で、内容は、江戸川区で自殺者の8割が死ぬ前に区の施設を利用していたとの記事であった。図書館を含めた区の様々な施設と接点があったとの記事である。例えば、困難を抱えた人の側に視点を当てて、そのような人が市の施設のどこを使っているのかとの統計を取ってみると、社会教育とし

て何をしたらいいのかが見えてくるのではないかと思った。

○事務局 福祉部門との連携も重要かと思うが、図書館などの施設では、トイレのペーパーホルダーのそばに、困っている方はこういう窓口にご相談できますよ、という掲示などはしている。

○委員 この新聞記事では、何か目的があって行くのではなく、ただ行ってみるだけでも、例えば図書館では、ただふらっと入っただけであるが、そこで本と出会って、その人の考え方を変えることができるのではないかとの記載内容であった。いろいろな観点から施設を見てみると、何かできるのではないかと思い意見を述べた。

○委員 資料7の④番、市内在住の絵本作家の方について伺いたい。本日、持参した本を2冊紹介する。一冊目は「おっちょこちょイ姫」という作品である。作家は小平在住の作家で、この本は、夏休みの課題図書にもなったものである。もう一冊は、小平第三小学校の卒業生の祖父が作家の作品である。このような小平市に関係ある本を掲示すると、「市内在住の」というワードですごく興味を引くことができ、読んでみたい気持ちになるかなと思う。

○事務局 図書館では、市内在住の作家に関して大沼図書館でコレクションをしていて、専用の棚を作っている。市内在中の作家については、図書館で把握していない作家さんもいるかもしれないので、そのような情報があれば、教えていただければと思う。

○委員 事務局報告で、地域学習支援課、公民館、図書館でさまざまな行事をやっていただいて、体験を重視してやっていることは、本当に小平のこどもたちにすごくありがたいお話だなと思って聞いていた。体験をすることで、自己肯定感が上がると言われていて、何の体験ということではなく、さまざまな体験があるので、多方面からやっていただくのは本当にありがたいことだと思っている。

そこで質問がある。資料№.6や7についてである。国立音楽大学のサークルの方と、また、子育てサークルKOGUMA CAFEさんとのコラボなど、本当にありがたい話ではあるが、よりターゲットを絞っていくこと、社会教育の観点からいくと、人生100年時代の学校教育が始まる前、あとは終わった後、学び続ける環境を作れることを想定して、循環型を目指していただかないといけないのかなと思っている。その中で、多種多様なところに手を伸ばしていただくのはありがたいが、さらに、よりポイントを絞っていかないと市役所の仕事がパンクしてしまうのかと思う。

ブックスタートの実施など、全子育て世帯に届く事業は、小平で学ぶ全てのこどもに対して手が届く事業である。このような事業の繰り返しで、1年後、2年後ではなく、学んだこどもたちが、大人になったときに戻ってくることを考えると、そのような事業を重点的に考えるような方針があってもいいかと思う。

また、なかまちテラスで高校生と共に行う事業は、教えるより、引き込んでいる事業に見える。利用している側、スタッフ側の双方が、循環できることを目指して事業に臨み、この世代には特に手を差し伸べる、この世代からは特に手助けをしてもらうなど重点を置いて考えるといいのではないか。スクラップ&ビルドのスクラップの面を果敢に攻めていき、こちらに行くことをはっきり示してみる、そのような姿勢が必要ではないか。

幅広い支援は、市民から見たら本当にありがたいものであるが、満遍なく薄くなってしまうより、循環型の事業展開を行い、事業を検討していただいたほうがいいのかなと思う。なぜそのように考えたかという、資料の「心を豊かにする図書館をめざして」では、例えば66ページには、トイレの洋式化まで記載がある。バリアフリーの観点からは必要な事業であると思うが、完全に完璧を目指していくと、どこか抜けてしまうのではないか。手を抜けということでは全くないが、循環が見えるような形を示した上で、さらに、この点に関してより重点的に行うものを示す。そのために、この事業とこの事業を統合して考える方向性が必要ではないか。

○事務局 今回配付した冊子について、年々データ数も増えてきている状況である。委員の意見のとおり、事業が膨らみ全体として持続していくことが大変な面も確かにある。時代の変遷により、サービスの内容など、見直していくべきところもあると思う。新しいことをやっていくことと合わせて、見直しをしていくことも重要と考え進めていく。

また、図書館だけでこれだけの事業をなかなか全てやっていくのは、やはり大変である。ボランティア、図書館では、子ども文庫連絡協議会の皆さんなど、多くの方の支えによって成り立っている部分もある。

○委員 非核平和学習事業について、前回、報告いただいているが、今回は講師が体調不良で講演記録の上映とのことであった。そのため、これまで行われてきた参加者と質疑応答というのは、行われていない。そこで提案であるが、地域の中で体験されている方や有識者の方も参加されていることで、意見のキャッチボールができるのではないか。そうすることにより、平和学習がさらに深まるのではないか。

○事務局 今回は講演記録の映像の上映のみの形であったが、次回以降は、新たな人材を確保して、参加者との意見のキャッチボールを行う視点は必要であると思っている。そのためには体験者の高齢化が進んでいく中で、実際に体験した人以外でも、その記憶を引き継いだ人も含め、人材の選定を考えていかなければいけないと思っている。